

## 記念講演

### 須賀しのぶさんによる記念講演 「本と埼玉と私」

記念講演は、作家の須賀しのぶさんにお越しいただきました。御自身の本に関する経験など、貴重なお話をたっぷり語ってくださいました。

#### 生涯埼玉作家

今回は埼玉出身ということでこの講演の依頼をいただきましたが、出身どころではなくずっと埼玉。何度も出ようとしたことはありますが、そのたびに邪魔が入り、これは埼玉がここで一生がんばれと言っているのだなどお墓も買いました。埼玉出身というだけでなく、生涯埼玉作家ということもぜひ覚えて帰っていただきたいと思います。

#### 私と一緒に！と共感

子どものころは地元の図書館に連れて行ってもらうのがとても嬉しかったです。図書館に通うのは大体月2回。続きを読むまでがとても長く感じられ、色々妄想しました。あまりにも妄想しすぎて、いざ続きを読んだら「これは私の知っている話ではない」とまでなってしまうこともありました。ここで妄想力が培われたのが小説家になる第一歩だったのかもしれない。

小学生になり、図書室も利用しつつ、とうとう手を出したのは一般文芸書のつまった家の本棚です。特に、装丁の美しいロシア文学全集に惹かれました。文化も価値観もちがう物語に苦戦する中、ある本に出会ったとき、物語の中がごとく入り込むことができました。それがドストエフスキーの『罪と罰』です。罪を犯した主人公が身の潔白を示そうと、

彼に疑いをかける人物の前でわざとはしゃぐ場面で「これって大人の前で悪いことを誤魔化す私の行動と一緒に！」と強い衝撃を受けます。ここから共感によって物語の世界に入っていくという感覚を知りました。

その後、コバルト文庫で氷室冴子先生の作品にハマり、中学生のときには妄想ノートというものをつけ始めます。女性主人公の大河ものの少なさに物足りなさを感じたところからつけはじめたこのノートには、小説の設定や色々な歴史上の国のおいしいところを寄せ集めて作り出した世界のことなどを書き連ね、それが後の代表作『流血女神伝』に結実することになります。

#### 小説を全く読まない時期

高校時代には小説を全く読まない時期を迎えます。そのきっかけは、1989年ドイツでおきたベルリンの壁崩壊です。東西ドイツが崩壊するという全く予想もしていなかった出来事に「物事の結果ではなくいきさつを知らなければ、これからのにも予想することはできないし、世界というものを見る目は養えない」と、小説を読むのをやめ、歴史やドキュメンタリーに興味を持つようになります。受験勉強そっちのけで、図書館の資料を読み込んでいました。その中で感じたナチスに対する疑問は、2010年に出版した『神の棘』という作品に結実します。

#### 歴史から逃れ、SF小説を書く

受験はなんとか成功し、志望通り史学科に入学します。大学生活は、勉強漬けというわけではありませんでしたが、とにかく図書館にはよく通いました。日々通い詰めていたある日、突然嫌になり逃避行動に入ります。とにかく歴史から逃れたい、歴史の反対はなにか、未来だ、とSF小説を書き始めるのです。

1週間で100枚の原稿を書ききり、かつて親しんだコバルト文庫のノベル大賞に応募しました。受賞したら氷室先生にお会いできるかも、などといった不純な動機でしたが、これがコバルト読者大賞を受賞して、大学4年の春に連絡をもらいデビューが決まります。周りからは就職するように勧められますが、自分は2つのことを同時にできるような人間ではないとわかっていたので、働きながら小説は書けないと思い、親にどうか2年間頑張らせてくださいと説得しました。

その後は必死に創作活動に取り組む中で、少女小説から色々なことを教わりました。自分の現在の専門であるヨーロッパ近現代を舞台にした小説を書く際にも、このとき学んだ、読者の感性に沿うことと自分の書きたいものを書くこととの折り合いのつけ方は活かされています。

### 新たな趣味、埼玉高校野球の観戦

少女小説の執筆で大変だったことは、読者が若いこともあり続刊の間をあけられなかったことです。1年に7～8冊出版することは当たり前で、常に原稿に追われていました。そのような中で、新たな趣味に出会います。それが野球、とくに埼玉高校野球の観戦です。県大会のある7月は、体調を崩しながらも、朝早く起きて球場を渡り歩き、帰宅して夜遅くまで執筆するということを繰り返していました。このときの経験が、初の高校野球小説『雲は湧き、光あふれて』につながりました。普段は歴史ものを書くが夏になると高校野球ものを書くというサイクルの中で、2018年に高校野球もののラストを飾ろうと『夏空白花』という作品を上梓します。この作品は1945年8月15日の玉音放送から始まります。自分の専門である歴史ものと、もうひとつの流れである高校野球ものを融合させようと執筆に取り組みました。

### 一次資料の大切さ

ここで非常に難航したのはGHQと高校野球を関連付ける資料がほとんどないことでした。困り果てていたところに、編集さんが当時の大阪朝日新聞をコピーしてきてくれ、これが大変助かりました。一次資料のもつ迫力は本当にすごいです。当時の世相や、人々が何を欲していたかということがダイレクトに伝わってきます。

この本と前後して『また、桜の国で』という第二次世界大戦期のポーランドを舞台にした小説を書きましたが、これがまた日本では資料がありませんでした。ワルシャワに飛び、物語のクライマックスの出来事である蜂起記念館で現地の司書の力も借りながら資料をかき集めました。

私は共感というものを糸口にその世界に入っていくという喜びを得ましたが、自分が書くときには共感できる人物を配置するだけではなくて、リアルにその人たちが生きている世界をつくらなければなりません。そのためには自分がそこに入り込まなければいけないので、やはり一次資料にあたるというのは大切です。今だと海外資料もネットで簡単に手に入りますが、やはり一次資料というのは現地の図書館や資料館といった所に足を運ぶのが1番効果的だと思います。ちょうど先月上梓した『荒城に白百合ありて』という作品では、会津についての資料は現地の書店で収集しました。



## 共感から世界に入っていく喜び

そうやって色々な資料に当たって書くことが、自分にとって本当に楽しいですし、子供のころに感じた、共感から世界に入っていく喜びを色々な人に伝えたいと思っていますが、なかなか難しいです。ですが、いつも思っていることは、読んでいる方に、その本を読んでいる間は同じように小説の世界の中に生きて、いろんな思いを主人公たちと共有してほしいということです。今は自分が書く側に回って、共感を入り口とした物語の世界を作り出すという仕事についているということは、不思議であり、幸せなことだと感じています。

この情報のあふれる社会の中で、長い時間と確固たる意志を持って書かれた本という知識の中に腰を据えて、ゆったりと広い世界を俯瞰してみてもいいというのは大切なことだと思いますし、なにより楽しいことです。皆様にもそういった機会を今以上にもっていただきたいです。私も微力ながら、そのお手伝いをこれからもさせていただきたいと思っています。

講演後には、会場からたくさんの質問があり、そのひとつひとつに丁寧に答えくださいました。ここで、あげられた質問の一部を御紹介します。

Q 主人公、特に女性が過酷な運命をたどることが多いのですが、理由はありますか？

A なんとなくそうなるんですよね。別に意識して酷い目に合わせようという気は全然ないんです。例えば男性主人公の場合ですと、けっこう社会的に表に出てくるから自分で動いたり動かしたりできるのですが、女性の場合だとなかなか難しい所があって、そうすると色々なことにまきこまれて酷い目に合ってしまうことが多いです。

Q 「須賀しのぶツアー」として、作品の舞台であるドイツとオーストリアに個人的に行ってきました。須賀先生は、旅行記やエッセイを出される予定はありますか？

A 確かにそういうのも、おもしろいかなと思いますね。人の旅行記とかはよく読むくせに、自分で書こうという発想は全然ありませんでした。検討してみたいと思います。

Q 『革命前夜』についてのお話が御講演の中で無かったので、どのように書かれたのかなど教えていただけたら。

A 『革命前夜』の話をすっかり忘れておりました。それまで第2次世界大戦をメインに書いてきたので、もうちょっと最近の話を書いてみようということになりました。そこで、私にとって1番リアルな歴史って何？と聞かれたときに、それはベルリンの壁の崩壊ですとなって、じゃあその話を書きましょうとなって書きました。自分が知っているリアルな歴史を書いて自分自身が歴史に、もう一歩深く踏み入れるきっかけになるといいなと思いながら書きました。

須賀しのぶさん、大変お忙しい中、御講演いただき、本当にありがとうございました。



(記録：埼玉県立鷲宮高等学校 大串 絢美)